



日本福音ルーテル教会 北海道特別教区報

第40期第2号
2020年9月5日
発行者：小泉基

祈れない祈りを祈る

教区長：小泉 基

感染症への恐れが広がる日々の中で、なぜわたしたちは主の祈りを祈るのでしょうか。何も見なくても覚えられるくらいの、そして食前に祈っても食事が冷めてしまわないくらいの"ちょうどいい祈り"だからでしょうか。もちろんそれでも充分よいと思います。

けれども主の祈りにはそうした身近な理由を超えた深みと広がりがあることも見逃したくありません。せつかく祈るのならば味わいを深めつつ祈りたいのです。なんととっても嬉しいのは、この祈りは他でもないイエスさまご自身が教えてくださった祈りであることです。けれども、イエスさまがこのように祈



りなさいと教えられたのには理由があります。それは、これがわたしたちの心から素直に出てくる祈りではない、わたしたちが祈ろうとしない祈りだからです。

冒頭の部分からそうです。「み名をあがめさせたまえ」。神さまに栄光がありますようにという意味です。けれども実のところ、わたしたちはしばしば「自分の仕事が上手くいきますように」「わたしの働きが成果を生みますように」というような、わたしに栄誉が与えられることを求めて祈っています。それは「み名があがめられる」こととは反対側にあることです。あるいはわたしたちは、「み心を地にもなさせたまえ」と祈るのではなく、「自分の願いが叶いますように」と祈ります。み心ではなく、自分の思いが優先されてしまう。またわたしたちはしばしば人間関係をこじらせてしまうのですが、その時に「あの意地悪な人の力が早く失われますように」と願うのであって「わたしはあの人を許しています」とはなかなか祈れない。「わたしの罪をゆるしてください」と祈らないで「あの人を罪を正してください」と祈っている。つまりこの主の祈りは、わたしの思いの代弁ではなく、わたしが祈ろうとはしない祈り、わたしの心が共感しにくい祈りである。だからこそイエスさまがこのように祈りなさいと教えてくださったのです。

この主の祈りは、「わたしに」ではなく「われらに」と祈ります。教区の信仰の友のことを思い浮かべながら、困惑と苦しみの中にある世界を覚えつつ、わたしではなくわたしたちがみ名をあがめ、日々の糧に恵まれ、悪から救い出されるように祈りたいと思います。

教区では次回の常議員会で、この主の祈りに焦点をあてる新しい交わりを提言する予定です。この主の祈りをわたしたちの羅針盤として、ともに祈りをあわせてまいりましょう。

介護支援員【函館教会：岩崎明子】

介護専門支援員として約9年。この職についてしばらくして洗礼を受けました。人が相手の仕事なので困難なことがあります、信仰があるから続けていると思います。

コロナウィルスが流行し始めた頃、入院中の方、施設で生活している方たちは面会禁止となりしばらく会えなく多少の不自由さはありませんでしたが、自宅で生活している方たちへの支援が大半で、それに対しては大きな変わりなく業務を行っていました。

現在、面会は一部ほんの少し緩和されましたが、状況が長期化するに伴い感染予防対策がより強化されています。例えば感染者の多い地域からの訪問者と接触した場合、訪問者がいる間や訪問者が帰宅後約2週間サービスの提供を控えさせてほしい等。利用者に関わる職員も同様で、その地域に自ら往来した場合も1～2週間出勤出来ない等の方針を取る事業所が増えています。感染しない拡大させない対策です。

状況を理解している人は“仕方ないね。”と諦め、認知機能が低下し理解が出来ない人は“どうして会いに来ないの？”と不安に思う。どちらも寂しさを感じています。家族も同じです。“いつ会えるだろう？”

人との交わりを規制し時に関係性を閉ざす、思うようにならないストレスを解消出来ずにいる、結果孤独を覚え意欲が低下する。このウィルスの別の恐怖しさが見えてきました。この状況はまだ続くと思います。今後も感染予防と注意喚起に努めつつも寂しさや不安、ストレス等を共有し、繋がりはある、孤独ではない、と伝えていきたいと思います。神様の恵みがあるので、祈り求めることは必ず良い方向に導き、ことが整うように神様が働いて下さると確信しています。

一日でも早く交わりを阻む状況が終息することを祈り求めます。



放課後学童支援【恵み野教会：藤井真理恵】

昨年春から放課後学童支援の働きに携わらせていただいています。コロナ禍になり緊急事態宣言が出てから、学童も急変しました。学校の休校に伴い、学童も朝8時からの1日保育となり、支援員も休みを返上しての勤務になりました。感染予防のため、うがい、手洗い、マスク着用、室内、遊具の除菌・消毒に明け暮れる毎日になりました。グループで和やかに分かち合いながら食べていたおやつも、完全個包装、一人一人の席、おしゃべりをしないで食べる。対面、密になる遊びや活動の禁止。大声走り回ることももちろん、感染予防の徹底。細かい手順の除菌・消毒の励行。いつしか上よりの要請・基準に正しく従っているか、ルールを守っているか否かで判断基準が置かれていっていることを、ふと立ち止まって感じるようになりました。コロナ禍にあっても大切に育まれながら、`互いに愛し合いなさい` `あなたの隣人を愛しなさい` という愛の律法に動かされたいものです。`Stay Home` 期間、休業できる家庭のお子さんは学童をお休みしましたが、医療、保育、介護、その他休業できない家庭の子供たちは続いて朝から学童生活。期間中、在宅勤務の家庭や祖父母宅に stay home しても限界があり、行き場のない子供が結局学童を利用する例もありました。幼・小・中・高・大の子供達が今、自分らしく思う存分に学んだり、遊んだり、活動ができない状況の中、その気づきにくい悩みにも届く支えの必要も感じます。いつの日かコロナが終わり、新しい未来を担うのはこの子供達なのだと思うと、祈らないわけにはいきません。コロナが1日も早く集結しますように。



勤務医【帯広教会：榊原政裕】



○いつから、どんなお仕事をなさっておられますか？

2012年4月から19床の有床診療所の医師として、外来診療、入院診療、訪問診療（特別養護老人ホーム1・養護老人ホーム1・グループホーム3）を担当しています。

○なぜ、このお仕事を選ばれたのですか？

地域医療とか農村医療とか田舎で医療の担い手になろうと考えたのです。もともと小さな集落の出身者。

○今回の感染症のことで、職場はどのように変化しましたか？

通常の感染対策行動に加えて、職員・患者・来院者の地理的移動に関する情報、毎日の体温自覚症状などのチェックを徹底するようになりました。

○そのことで、大変だったのは、どんなことですか？

あまりないのですが、漠然とした感染恐怖を訴える人に対応する時間が増えました。

○クリスチャンであることは、ご自身の現場で働くことに影響がありますか？

わかりません・・・以前と変わったところはないでしょう。

○教会のみなさんに、ひとことメッセージを。

コロナウイルスを持っていない人が何人集まっても安全に礼拝はできると思います。

私は感染しているかも知れないという疑義あり状態の人はどうのような集まりにも出席すべきではありません。主がともに

【ルーテルの青年たち】

4月初め、外出自粛が呼びかけられる中でルーテルの青年たちは独自にオンラインでの集会を行っていました。その中で中心となって動いた藤崎幸子姉に、当時の状況について教えていただきました。

「ルーテル青年オンライン集会#おうちで集おう」藤崎幸子(恵み野教会)

るうてる7月号でも掲載がありましたが、2020/4/18～2020/6/6の期間で、毎週土曜日21時から計8回、全国の青年とオンラインで集会をおこなっていました。世間では新型コロナウイルスの影響により、緊急事態宣言が発表され、学校も仕事も教会も、多くのところで自粛生活となりました。この集会を始めるきっかけは、東京にいる青年とテレビ通話中にこの状況の中でなにかできることはないかなあと考えて生まれたものです。集会では奏楽者、祈祷者、み言葉朗読者、証者の奉仕依頼を毎回して青年で作る集会としました。特に印象に残ったものはペンテコステの週の集会で、み言葉の朗読を数名の青年が数小節ずつ多言語で朗読したことです。青年らしいアイデアでとても素敵でした。集会後は毎回交わりの時間を持ち、青年同士の仲を深めることもできました。オンライン上のタイムラグがある中、共に祈り、賛美をすることができたことがとてもよかったです。このような状況だからこそできた企画だったなと感じました。今もまだ新型コロナウイルスが落ち着かず、不安を抱えながら生活していますが、共に祈り合える仲間がいることを忘れずに、元の生活に戻れますようにと祈り続けていきます。

檜戸健次郎医師に聞く 海外医療支援のいま

聴き手：中島和喜

今回の教区報では「特集：COVID-19 最前線の現場での働き」と題して、わたしたちが新しく経験している COVID-19 下の生活の中でも、最も現場に近いところで働いておられる各教会のケアワーカーの方々に日々の働きについて語っていただきました。中でも札幌教会の檜戸健次郎さんは、JOCS(日本キリスト教海外医療協力会)から派遣されてネパールの僻地診療にかかわり、現在は北海道に足場を置きつつ NGO を設立して海外医療支援を行っておられる先生です。檜戸先生には特別編として、医師の立場から、また海外支援に関わってこられたキリスト者の立場から、現在の状況について存分に語っていただきました。

○いつから、どんなお仕事をなさっておられますか？

今現在は個人の立場でクロス NGO 法人の働き人としてネパールでの医療活動を中心に生活しています。ただ、ビザの関係で年5ヵ月しか滞在できないので、他の7ヵ月はバンコクに滞在したり、日本にいる時は、第一線を退いていますので北海道の僻地での当直をしたり、対がん協会として検診をしたりしています。また地方に出向いた際にはネパールのことなど、地域医療についての講演などを行っています。



○今回の感染症のことで、職場はどのように変化しましたか？

一番の変化は、本来は1年のうち3月、7月、9～11月ぐらいの三回に分けてネパールに滞在していますが、今年の3月はコロナの問題でネパールの国際飛行場が閉じられるということで、急遽予定を変更して帰ってきました。そのあと、4～5月6月はじめの講義などはほぼすべて中止になってしまいました。その分、家にいたり、予定以外に検診に出かけていたり、北海道の各地に行って検診事業に行っていました。当直は前に働いていた新冠や帯広教会の方がおられる浦幌などに行きます。それだけでなく検診は道内すべてに行っています。先日は利尻礼文島、今週は北見などにも行きます。

コロナの問題が出てきてから、三密を避けるなど感染をしないようにという指示が出ていますので、来られる方もあまり一度に来ないように要請したり、検温や消毒、30分に一度の換気など、検診を受けに来て感染したりということがないように、来られる方、またスタッフも注意をしました。病院では発熱などがある場合には、初めに電話で予約していただいて、導線を別にして別の部屋、車の中などに待機してもらうという対策をしていました。どの医療機関でも感染が出た場合は診療行為をストップしないといけないので、皆が緊張した様子で診療にあたっていました。

○そのことで大変だったのはどんなことですか？

私は特にそれほど感じていませんが、皆さんが心配してくれるのは、僕が感染すると、今まで受けている仕事を断らないといけないということです。穴が開いてしまいますし、ネパールにも行けなくなると大変になってしまいます。特に家族や近い友人からは、なるべ

く出歩かずに自宅で過ごすように勧められたりしていました。ある意味では家族と過ごせる時間が増えて充実もしていました。

医療従事者個人として考えると、心配や不安という恐怖がゼロというわけではありませんが、いろんな病気に遭遇していますし、もっと大きな感染症は歴史の中でたくさんあります。コロナのウイルスの状況を見れば、これまでのものと比較すれば、それほど大きなパンデミックではないと理解していますので、ある程度注意をしてことに処すれば回避できると考えています。一般の方々がいつ感染するか分からないと考えるのは分かりますが、それでも統計的に見れば死亡率は0.5~2.3パーセントと考えれば、他の何10パーセントという病気と比べるとさほどでもないと気持ちを落ち着けています。

○様々な場所に行っているということですが、場所によってコロナに対する危機感に違いなどはありますか？

場所によって少し違います。札幌にいとそれほどでもないですが、感染者の報告が少ない地域に行くと、札幌から来たということ病気を持ってきたのではないかという心配が出ています。場合によっては札幌からは来ないでほしいとか。今の東京で考えても1000人に一人という割合なので、999人は大丈夫と言っても不安になってしまいます。感染が多いところから来ると心配するという感情をやはりもっていると思います。

札幌と言っても、200万の内のほんの一部で、普通に過ごしていれば移るということはないのですが、毎日の報道などでスポットライトが当たるとそれがとても大きく見えてしまうということですね。

○ネパールの現状は？

私は3月21日にネパールをでましたが、22日には国際飛行場が閉鎖になり、所謂ロックダウンになりました。ロックダウンになると患者も来なくなり、モノの流れも悪くなります。その中で私の関わる病院は政府の要請によりコロナの指定病院になりました。指定病院になりましたので準備が必要だけでも患者は来ません。つまり、お金が入ってきません。それでも薬、防護服を買わないといけませんし、電気を発電するための重油、さらにはスタッフの賃金も払わないといけません。そのため資金的な支援がほしいとの要請が4月19日に来ました。送金をするために、NPO法人「どさんこ海外医療協力隊」に支援依頼を出し、募金先を一本化して対応し、これまでに大体400万近く集まりました。送金にはタイミングがありますので、4~7月に250万を送金しました。メールでやり取りをしながらレポートでの報告を受けています。私自身は口座を作ったりなどをしていました。メールでのやり取りによってネパールの状態も分かりました。関りのある病院のスタッフが一人感染したとのことです。それ以上に問題なのは、経済が動かないことです。ネパールという国には産業がありません。国の予算の三分の一が観光。三分の一が外国援助。三分の一が出稼ぎからの送金で成り立っています。今はネパールから300万人ほどがインド、中近東などに出稼ぎに行っていますが、ロックダウンで締めだされてしまいました。ようやくロックダウンが解除されたので、少しずつ帰ってはきています。ネパールは1万8000人ほどが感染し、死者は少なく40人ほどです。病院は一般診療とコロナの患者で分けて対応しています。私の関わる病院は地方の唯一の病院なので、奮闘しているところです。私らが直接行って手伝うということも出来ないなので、今は資金や物資という形で支援しています。4月初めの段階で、大使館から非接触性の体温計が必要とのことで中国から購入

しましたが持って行けていない状態です。さらに N95 のマスクを手配し、郵送しました。アフリカなどを含めた開発途上国などは、コロナでの死亡よりも、ロックダウンなどで経済が止まり、仕事がなくなることで飢餓での死亡率の方がずっと高いです。感染よりも、1~2 週間何も食べられないということの方がよっぽど危険な状態です。住んでいる方にとっては緊迫した状況で、生死に関わる問題となっています。日本のようにある程度お金持ちの国で、1~2 か月であれば食べるものが何とかなる国では問題になりませんが、発展途上国のような場所では命の危機になります。そのため、そのような国では感染を仕方ないとして、経済を回さないといけません。しかし、そうするとまたコロナの患者が増えます。それとどう地方の病院が向き合っていくかということを考えていかなければなりません。8月17日にはネパールの国際飛行場が開きますので、9月ごろには現地を手伝いに行けることを考えているところです。

○クリスチャンであることは、ご自身の現場で働くことに影響がありますか？また、教会の皆さんに一言メッセージをお願いします。

これまでを含めるのであれば、ある意味では恵まれたところで仕事をさせていただいています。患者さんの苦しみを少しでも和らげることができるのであれば、愛の実践が具体的に見えるところで仕事をさせていただけるのは、恵まれたところで仕事をさせていただいていると思います。教会のみなさんも気を付けて、日々の御用にお励みください。

インタビューを終えて

ネパールの現状は日本の現状と全く違うものであり、危機感も日本のものとは違うものであることを知り、大変驚かされました。少なくとも私の中では COVID-19 の影響と「飢え」は直結したものではありませんでした。命のために必要なものが絶たれるという痛みは一体どれほどのものなのか、私には想像すら出来ません。「命を守ること」「生き抜くこと」似ているようで全く別物であることを思わされ、ウイルスがもたらした影響の深刻さ、幅広さを改めて教えられたように思います。

今回のインタビューを通して、私は自分が「裕福」な立場にあるのだと感じました。飢えることも、渴くことも、金銭的にも幸いにして守られています。しかし、現状に対して満足しているかと聞かれれば、礼拝も集会も行事も中止し、自分の行動も制限され、何より自分が感染し人に移すかもしれないという不安に、日々不満を感じている自分がいるのです。過酷な状況に苛まれている人の話を聞くと、どこかで「自分以上に大変な思いをしている」という感情と共に、「自分は裕福なのだから」と自分の痛みは脇に置いておくべきと考えてしまいます。しかし、今の私たちの現状でなすべきことは、そのような痛み比べでも、救われるべき人の優先順位の考察でもないのでしょうか。過酷な状況で働くことも、飢えることも、我慢して家で独り過ごさなければならぬことも、どれも辛いものであると思います。私たちはそのことを通して、様々な面で苦しむ方を覚え、その方々と共に痛み、その方々を覚え祈っていくことが大切であると思うのです。私たちにはどれだけの人々がどのように痛みを覚えているか、その全貌を知ることは不可能です。そのために、何をどう祈れば良いのかもわからなくなってしまう時もあります。だからこそ、私たちは主が教えてくださった言葉を通して「主のみ心がなりますように」と祈り合わせ、すべての人に、主の平安があることを祈り求めていきたいと願います。(中島)

ルターの「主の祈り」

ルターは、人々が主の祈りを礼拝の中で心を込めて祈ることが出来るようにと、主の祈りの解説的な讃美歌を作って自身の聖歌集に載せました。聖公会の井田泉司祭がこのルターの主の祈りを翻訳してご自身のウェブサイトに掲載してくださっています。井田先生の許可を得てここでみなさまに紹介したいと思います。[編集委員会]

天の国におられるわたしたちの父よ、

あなたはわたしたちすべてに命じられます。共に兄弟となってあなたを呼ぶようにと。あなたはわたしたちに祈ることを求められます。ただ口で祈るだけではないようにしてください。心の底から祈りが起こるように助けてください！

あなたのみ名が聖とされますように。

あなたのみ言葉がわたしたちのもとで清く保たれますように。わたしたちもあなたのみ名にふさわしく 聖(きよ)く生きることができますように。わたしたちを守ってください、主よ、偽りの教えから。欺かれたあわれな民が立ち帰りますように！

あなたのみ国がこの時に来ますように、

そしてそこに永遠にとどまりますように。聖霊がわたしたちに宿りますように、そのさまざまな賜物をもって。サタンの怒りと過酷な支配が打ち砕かれますように。その前であなたの教会が保たれますように！

あなたの意志が実現しますように、主なる神よ、天の国でと同じように地上でも。

苦しみの時、わたしたちに忍耐をお与えください。愛においても苦しみににおいても従わせてください。すべての肉と血(の欲)から守り防いでください。それはあなたの意志に逆らって働くのです！

わたしたちに今日、わたしたちの日ごとのパンをお与えください。

また人が生きるのに必要とするものを。わたしたちを守ってください、主よ、不和と争いから、また疫病から、生きがたい時から、わたしたちが良き平和のうちにしっかりと立ち、心配と食欲に煩わされることがありませんように！

すべてのわたしたちの罪を赦してください、

主よ、それらがもうわたしたちを悲しませることがないように。

わたしたちがわたしたちに負い目のある者に対して罪と過ちを喜んで赦すように。

わたしたちすべてに、正しい愛と一致をもって仕える用意をさせてください！

わたしたちを試みに導かないでください、

主よ、悪しき霊がわたしたちを左手右手に惑わすとき、わたしたちを助けてください、強く抵抗できるように、確かによく備えられた信仰によって。そして聖霊の慰めによって。

すべての悪からわたしたちをお救いください。

今は悪い時代です。わたしたちを永遠の死からお救いください。

最後の苦しみのとき、わたしたちを慰めてください。

わたしたちにも祝福に満ちた終わりを与えてください。

わたしたちの魂をあなたのみ手に捕らえてください！

アーメン、

このことがほんとうにそうなりますように！わたしたちの信仰を永遠に強めてください。わたしたちがここで祈ったことをわたしたちが疑うことのないようにしてください。あなたのみ言葉とあなたのみ名によって。そのようにわたしたちはこのアーメンを心から唱えます。

JELC-NRK 合同教職者会の報告

日笠山吉之

毎夏恒例の日本ルーテル教団(以下 NRK)北海道地区の先生方との合同教職者会は、コロナウイルス感染拡大を考慮して、今年は8月3日(月)に半日のみ行われました。場所は、NRK 札幌中央教会。JELC から4名、NRK から5名の合わせて9名が参加しました。ソーシャルディスタンスを確保するために広い会議室が用意され、互いの席と席の間も十分な距離を取って会は進められました。岡田薫牧師の開会礼拝に続いて、早速今年の研修の主題「今ここでの宣教～外キ協の取り組みを学ぶ」へ。小泉基牧師と NRK 白井真樹牧師からそれぞれ「指紋拒否運動から外国人住民基本法へ」「北海道外キ連の活動について」という発題をいただき、その後は参加者全員が自分がこれまでに出会った外国籍の方々との体験を分かち合いました。「外キ協」の正式名称は「外国人住民基本法の制定を求める全国キリスト教連絡協議会」。私たちと同じこの国に住みながら未だ基本的な人権さえ守られていない外国人の方々のために、教会として何が出来るか？異邦人にも福音を伝えられたイエスさまの宣教の働きを覚えつつ、これからも考えていきたいと思えます。研修の後は、両教団の現状と課題について、NRK 北海道地区議長の吉田達臣牧師と JELC 北海道特別教区長の小泉牧師から報告があり、最後に NRK 木村繁雄牧師の礼拝によって会が閉じられました。短時間でしたが、大変有意義な学びの時となりました。来年にはコロナも終息してもっとゆったりとしたプログラムが組めますように。教区からの支援に感謝しつつ。



教籍動向 (6月1日～8月31日)

恵み野教会

・召天 坂部亮子姉 (7月21日)

・洗礼 中島瑞貴さん (8月16日)